

# 「吃音でもいい」語り合おう



熱心に指導する伊藤さん(右から2人目)を囲んでの吃音教室

医療を追って

くりに向けよと呼びかけ、会員ばかりでなく、この問題に取り組む人たちに発想の百八十度転換を迫った。

吃音は三歳から七歳、えびに始まり、十人に八人は自然に治るが、残りの二人は大人になっても癒へ。なぜ八人は自然に治るかわかっていないし、完全な治療法もまだない。

こうした現実の中で、吃音者宣言を实践する場として昨年四月、吃音教室が生まれた。これはいいと思つたプログラムはどんな欲に取り入れ、人間関係や生活態度を重視するユニークな講座にしている。

世界の仲間が集まればどんなにおもしろいだろうと、一昨年八月、全国言友会連絡協議会の主催で、第一回吃音問題研究国際大会を京都で開催した。

「吃音は個性の一つ。いかに言うべき言葉を持っているかの方が大切」と伊藤さん。こだわり過ぎて自分の姿を見失っていないか。表面にあらわれない言葉のみにとらわれていないか。言友会の活動は人間のあり方を問いかけるものだ。 科学部・西田 裕美

## 無理に治さない 豊かな生き方実践教室

「せ、せつ者親方と申すは、お、お、お立ち会いの中に、ご、ご存じのお方も」。毎週でせりふを繰り返す。和気あいあいの雰囲気だ。

金曜日の夜、大阪・森之宮の市立労働会館で開かれる大阪言友会の吃音(きつおん)教室は、何と歌舞伎役者のせりふの練習で始まる。講師は元大阪教育大教員で、現在、市内でカレー専門店を経営する伊藤伸二さん(四三)。自分も吃音者で、大阪をはじめ全国二十三地区の言友会の集まりである全国言友会連絡協議会の会長を務めている。

三十八人ほどの参加者は大半が仕事帰りのサラリーマン。あんな多人数に出会えた。私

自身が差別してきた、自分の中の吃音を直視できるようになったと明るく話す。

山本さんが「あれは衝撃的なんですよね」と言うのは、十二年前、言友会創立十周年記念大会で出された吃音者宣言。△治ってから的人生を夢みるより、人としての責務を怠っている自分を恥じよう。どもりながらもたくましく生き、すべての人びとと連携していこうとつたっている。

つまり、治す努力を否定し、治すために費やしてきた時間を自分なりの豊かな生き方づ